

幕末陽明学者吉村秋陽の明末思想理解

―「格致贍議」を通して(一)―

荒木龍太郎

要旨

幕末期陽明学者吉村秋陽(一七九七〜一八六六)の中国明代の王陽明(一四七二〜一五二八)と劉念台(一五七八〜一六四五)の思想についての理解を秋陽の「格致贍議」に於いて検討する。そしてこれを今日の研究状況と比較し日本陽明学の性格を明らかにする。

キーワード

王学 陽明学 吉村秋陽 大橋訥庵 王陽明 劉念台 井上哲次郎 東敬治 吉本襄 幕末維新时期

第一章 はじめに「日本陽明学」について

幕末期の陽明学者吉村秋陽の「格致贍議」は明治期に吉本襄の雑誌『陽明学』(明治29年刊)に掲載され、また秋陽の弟子東沢寫の嗣子・東敬治の雑誌『王学雑誌』(明治39年刊)に秋陽の孫・吉村彰が、「陽明学の大意」「陽明学問答」掲載している。幕末期から明治期へ「陽明学」はどのように継承されたのであろうか。

幕末期の儒者の多くは陽明学を「王学」と呼称していた。事実、

秋陽の代表的著述の題目も『王学堤綱』となっている。しかし明治期になると「陽明学」という呼称が優勢となっていく。先述の『陽明学』雑誌に加え、明治33年には井上哲次郎の『日本陽明学派之哲学』が出版され「国民道德」の興起宣揚を説いている。

江戸幕末期の「王学」から明治期の「陽明学」への呼称変化ではあるがそこには陽明思想に対する関わり方の変化が存在していると考えられる。まず「陽明学」の呼称を確認しておきたい。

「陽明学」の呼称は、中国においては王陽明のほば一世代後の鄭曉(一四九三〜一五六六)にすでに確認できる

「今人專指斥陽明學術、余不知学、……安仁(桂萼)謂陽明学本邪說、功由詭遇。又曰王某心事、衆所共疑。何其不諒至此。」(『今言』卷四・一五六六年自序)

また『明史』では「学者翕然從之。世遂有陽明学云。」(卷一百九十五列伝第八十三)、「王畿、字汝中、山陰人。弱冠舉於鄉、跌宕自喜。後受業王守仁。……而泰州王良亦受業守仁、門徒之盛、與畿相埒、学者稱心齋先生。陽明学派、以龍谿、心齋為得其宗。」(卷二百八十三列伝一七一・儒林伝四)とあり、『明儒学案』には「先生既知聖人之学、不失其本心、便是復性、則陽明之以心即理、若合符契矣、……而謂陽明学不從窮事物之理、守吾此心、未有能中於理者、無乃自背其說乎。」(卷四十八・諸儒学案)とある。これら『明史』『明儒学案』は、昌平覺に遊学した学徒も読んでいたであろう。

江戸期に於ける「陽明学」の用例に注意すべきは、朱舜水(名は之瑜、字は魯若。一六〇〇〜一六八二。一六五九年日本に帰化、水戸藩に招聘され教授)に師事した安東省庵(名は守約、字は魯默。一六二二〜一七〇一。柳川藩儒)が、一六六三年に翻刻した陽明学批判書『学

「薛通弁」には朱子学を擁護する陳建（一四九七〜一五六七）が「按陽明学專説悟。雖六経、猶糟粕影響故紙陳編、而又何有於朱子。」（続編下・和刻本・近世漢籍叢刊本）と述べている。この書は一八五七年に官版としても上木されており、呼称としては認知されていたと考えられる。

幕末の横井小楠は嘉永四年（一八五二）の「遊歴聞見書」で「陽明学は熊沢一人」と述べ、吉田松陰は『己未文稿』で「陽明学」を使用し、また『吉田松陰全集』の安政六年（一八五九）の「入江杉蔵宛書簡」には「朱子学・陽明学」を使用している。ただ幕末期において陽明思想を考究していた儒者には「陽明学」の使用例は見られない。

明治期以降に「陽明学」に関する刊行物が表れる（末尾資料参照）。これらを検討し江戸期「王学」と異なる「陽明学」に含まれる意味の一端を明らかにしたい。以下論述で煩雑を避けるため記号を使用した。

(A) 吉本襄・鉄華書院「陽明学」

明治二十九年七月五日創刊〜三十三年五月二十日79・80合併号終刊

(B) 井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』

明治三十三年十月十三日発行

(C・1) 東敬治・明善学社『王学雑誌』

明治三十九年三月二十五日発行

『王学雑誌』第三卷8号Ⅱ『陽明学』第1号

(C・2) 明善学社を陽明学会と改名『陽明学』

明治四十一年十一月発行〜昭和三年四月一日第196号、終刊。

(A) 雑誌名は『陽明学』であるが掲載文の題目に「陽明学」使用は二例ほどあるが、他は「王陽明の学」、「王学」、「王子の学」である。ただ注意すべきは(A)の第1号巻頭論文に井上哲次郎の「王陽明の学を論ず」（明治29年）が掲載されていることである。井上は西洋哲学史をモデル、下敷きにして「支那の哲学史上……」「王陽明程の哲学者」「王陽明の哲学」「王陽明学派」（1号）と「哲学者」「哲学史」で整理し、「陽明の学は倫理学」（2号）と表現している。西洋哲学の概念に当てはめての説明である。井上哲次郎の幕末期の日本儒学者への見方の特徴と言えるであろう。その見地から江戸期の陽明学者が「王陽明を尊崇」（1号）したという表現が出てきたといえる。

次に(B)の『日本陽明学派之哲学』を検討したい。

〔明治33年9月24日初版序〕には

「国民的道德Ⅱ心徳Ⅱ東洋道德の精粹」の発揚を目指す所あり、〔明治34年2月24日三版序〕では「陽明学は理論に疎くして認識に缺くる所ありと雖も亦内外一致を期し、修得の工夫として実行に適切なものある」と述べている。

さらに〔明治36年4月20日四版序〕では、

中江藤樹を最も評価し、「陽明学派の倫理思想は今より之を觀れば、大抵主観主義的に偏し、客観的認識を尊重するの念に乏し……主観的に偏するが如きは、客観的認識を尊重するの念によりて之を補充すべきなり。然れども主観的の倫理思想に於いては陽明学派の多年寄与する所決して鮮少なあらざるなり。」と述べている。

井上哲次郎の(B)は「国民的道德」の興起宣揚をはかるものであるが、王陽明思想に対して西洋哲学の概念で形式的ではあるが解釈、説明する姿勢を示し、その「欠点」を「主観主義」であると指摘し、「倫理思想」として位置づけている。これは「王学」

に於いては導き出されなかつた見解である。

また〔大正13年11月17日の重訂日本陽明学派之哲学序〕では

「其の（陽明学派）特色を簡単に言へば、純潔玉の如き動機を抱き、壮烈乾坤を貫く底の精神を有することである。それで此学派には博學多識の學者を覓むれば割合に少ないけれども、高潔俊邁の君子人と實際家とは比較的多いのである。殊に中江藤樹の如きは、古今稀なる人格者である。今は祭神として藤樹神社に祀りて居るが、それは決して偶然ではない。日本の陽明学は固より陽明に淵源するのであるけれども、然れども半ばは藤樹学である。就中省察派に於ける藤樹の影響は頗る多大である。・：抑々藤樹の学説思想が如何なる影響を及ぼし、如何なる結果を生じたのであるか、歴史的に之を辿り、之を究め、之を明らかにすることを努めたのが本書である。」と述べている。

井上は「日本の陽明学派」の特色は、少々誇張の感があるが、「純潔の動機」「壮烈の精神」であつて、それを具現するのが「高潔俊邁の君子人と實際家」の中江藤樹であるとす。『日本陽明学』は「(中国)陽明学」に淵源するが、「藤樹学」の系統として見るのである。

この認識から幕末期の「吉村秋陽、奥宮慥斎、春日潜庵、池田草庵、東沢寫の徒は皆篤学の士にして力を心術に用いることを主とせり」(同書・第四篇 中斎以後の陽明学派)と述べる。江戸期の「王者」を「篤学の士」とし、「心術に努める」、自己の内面の修養に尽力することを主眼としていたと認識する。

そして吉村秋陽については「秋陽一たび王学を一斎に受けしより深く之を崇信し、終身其圈套中に留まれり。」「秋陽別に一家の創見あるにあらざるも、其志は頗る厚し。」(『日本陽明学派之哲学』同上)「秋陽、深く中江藤樹を追慕し、曾て藤樹先生真蹟の跋を作

る」(同)と評する。秋陽を藤樹の学統に置き、「王学」を「崇信」と判断する。ここに江戸幕末期の「王学」の様態に対する明治期の「陽明学」の相違点が表れていると言えよう。詳しく言うとう、井上哲次郎の陽明思想理解は(B)の「叙論」(初版・明治33年)に示されているが、甚だ不十分であるとは言えない。不備ではあるが心即理、知行関係、理気論などのテーマ設定は十分に評価できるのであつて、「王学の尊崇」とは別の、研究考察の対象とする観点を示している。

そして東敬治の(C・1)の第1号では「王学」と「陽明学」が混在している。目次には「陽明学と華嚴の法界観」、「王陽明学と神道」、「王学の概要」(東敬治)、「予が陽明学」、2号に「陽明学の大意」(吉村彰)、「陽明学問答」(吉村彰)などがあり、また「我薩藩にも、世に王学あるをば己に知しも、陽明の学はあらつぽいとゆう評判もありしが・・・」(王学者に冀望す「海江田子爵」とある。注意すべきは秋陽の孫である吉村彰が「陽明学」を使用していることである。ここに幕末期「王学」から明治期「陽明学」への推移を看取できる。さらに雑誌名の変更である。『王学雑誌』(明治39年)↓『陽明学』(明治41年)の変化には近代化による思想状況の激変が影響していると思われる。

東敬治の(C・2)『陽明学』(1号)には吉本襄の『陽明学』所載の「王陽明の学を論ず」(井上哲次郎)と同文を「陽明学に就いて」と題して再掲載している。前述の西洋哲学に当て嵌める認識である。「脱崇信」を示すものである。

また幕末期「王学」から「陽明学」への変化は、「王学」の一個人の心の修養ではなく対社会的能動性を顕著に志向し、(C・1)『王学雑誌』明善学社規則第1条「本社は陽明王子の学を振興し以て世道人心の扶植に資するを目的とす。」と表明し、これと同文を『陽

『陽明学会会則第1条にも掲載していることに明瞭に表れている。そして近代化が進む社会との関わりの中で「主観的」なあり方への認識は更に深まり、「崇信」の姿勢を脱して「倫理学」として客観的に意識する、相対化する志向を促したと言えよう。

例えば吉村彰の「陽明学の大意」(明治40年11月15日『王学雑誌』第2巻9号)にはその傾向が現れている。陽明思想の概略を説明する内容であるが、難解な陽明の「知行合一」を「知の真切篤実の処は即ち是れ行、行の明覚精察の処は、即ち是れ知」(『伝習録』巻中答顧東橋書)に依拠して説明し、知行合一の本旨が「本にかえる」ことであると正しく理解している。さらに陽明思想を「心学」として把握し、同じく心学である禅との相違が「理」の有無にあるとし、また朱子学との相違を『大学』解釈にあるとしつつ、その一致点を「慎独」であると創見を示し、朱子の『大学章句』の長所を指摘している。陽明学を朱子学、禅宗と比較検討し考察を進めている。明らかに「王学」の「崇信」の方法、領域からの脱却と云ってよいであろう。

明治期に吉村秋陽の孫(吉村彰)、門弟の嗣子(東敬治・一八六〇〜一九三五)らの活動は、幕末期「王学」者吉村秋陽、東沢寫の継承の様に見えるが、内実は明治期「陽明学」の「思想研究」の方法を身につけていたと言えるのである。

その上で近代化の中で、陽明学顕彰・宣揚活動を社会に対して「実践」するのである。江戸期「王学」には見られなかった光景である。「王学」から「陽明学」への呼称の変遷には、「崇信」から「陽明学研究」へと脱皮する認識の変化を含んでいたのである。

(吉村彰：字は世美、号は白齋、古処。一八五三〜一九〇八。享年五十六歳。明治八年広島で小学校教員第一号となり、広島師範学校に奉職。)

第二章 「格致贖議」論争の経緯

「格致贖議」は吉村秋陽と大橋訥庵の論争である。それぞれの経歴を紹介しておきたい。

吉村秋陽、名は晋、字は麗明、通称は重介、隆介、秋陽は号。寛政九年(一七九七)〜慶応二年(一八六六)、享年七十。広島藩支藩三原藩の陽明学者儒者で佐藤一斎の高足である。三十四歳の佐藤一斎への従学を契機として陽明学に転じた。四十六歳頃までに陽明学者としての学問を確立した。五十五歳の東行では佐藤一斎の代講をし、また藤樹書院で講釈した。朝陽館(広島城内)、明善堂(三原城内)、家塾で晩年に至るまで教授を行った。その間、佐藤一斎との師弟関係は緊密であり、大橋訥庵、春日潜庵、池田草庵、林良斎、楠本端山、楠本碩水等と終生真摯な交渉を継続し、門下には勤王の士の東沢瀉がいるが、秋陽の学問の傾向は直接的な政治行動よりも、着実な思索と体認とを重視するものであった。

大橋訥庵(一八一六〜一八六二)は、佐藤一斎に師事し、学問は陸王学から劉念台、そして朱子学と変遷する。勤王倒幕運動に走り、文久二年「坂下門外の変」で連座、投獄される。秋陽、草庵からは「権勢と利欲の海中に沈溺している」と批判される。

次に「格致贖議」関する経緯は次のとおりである。

①大橋訥庵から「与人論陸王書(A)」(弘化三年(一八四六)九月二十日)が送付される。

②「格致贖議(B)」(弘化四年(一八四七)51才の十一月十二日)

十二月三日、草稿を成し、翌嘉永元年（一八四八）正月に完成）、これを大橋に送付した。

③秋陽は『四書大全』に校点を行って多忙であった。

（後の『汪武曹四書大全』二十四卷四十八冊・安政元年刊の作業。）そのため、大橋の（A）に対する返書を52才（一八四八・十一月十九日）に認め、先に送った「格致贖議」への意見を聞く。（『読我書樓遺稿』巻一「与大橋周道（C）」）

④大橋訥庵は弘化四年（一八四七）頃から次第に王陽明から劉念台の思想に傾斜していた。

⑤大橋訥庵は「論格致贖議（D）」（嘉永三年・一八五〇・54才）を著し劉念台思想の立場から批判をした。

⑥秋陽「弁復書（E）」（嘉永四年二月六日・一八五一・55才）で反論した。

秋陽が陽明学を支持しするのに対し、切磋琢磨した「鳴鶴相和の諸士」（池田草庵、林良斎、春日潜庵、大橋訥庵）は念台思想を支持しており、大橋訥庵以外は「信奉」する思想が異なるとし議論を交わす事は無かった（このことは次稿にて論及）。

秋陽は以後、研鑽を積み『日本大学贖議』（二巻二冊・安政二年五月自序・政五年七月駿跋・安政六年浪華書房刊）、『王学提綱』（二巻二冊・文久元年自序・文久二年刊）を刊行している。

第三章 「格致贖議」の概略

「格致贖議」の概略を記しておきたい（詳細の註釈は次稿に譲る）。体裁は質問を設定し、それに答えるという形式である。内容は九

項目である。

（前言）学問は実功し自得することが重要である。

（1）「問い」『大学』の工夫は、朱子学では格物致知誠意正心知行前後の順序に分けているが、陽明は「誠意」のみを要とする。格物致知は誠意の手段であって知行が一つに渾融している。両者の得失はどうであるのか。

「答え」軽々しく論じることではない。学問は「為己」ものである。（損得に走ってはならない。）

（2）「問い」誠意の工夫はどうして格致にあるのか。「答え」「致」には推極充滿の意味があり、「格」は正。根拠があつて正す。誠は、「其の実体（根拠）」に復することである。渾然一体の良知は固有、身心意知物は一件であり、工夫の実地のところは格物致知にある。体験切実であつて「物格時后知至、知至而后意誠」となる。

（3）「問い」格物の「物」は「感応」であるが、感情、言動など発散している時は分かりやすいが収斂する場合は分かりにくい。どう「格（正）」すのか。

「答え」工夫をして本体を歪曲するものを減らしつくすと「本体は自然に呈露」する。

（4）「問い」先儒（朱子など）は「意」を「心之所発」とするから格致の工夫は「動処」に指し示すことが多い。陽明の『伝習録』「大学問」など参考にすべきであつて、あなた（秋陽）の説は恐らくは陽明の説と同じではない。

「答え」①意とは良知が（動静にかかわらず）生生と躍動する真機であり、絶妙で息むことがなく、常体は不変で、動と静の時があるが「良知の真機」は動静に分裂しない、とする。秋陽は「機」―動静未分の一点、動静一如、即ち已発の意、所発に移る前段階に着目

する。

②誠意の工夫が行われ意識から心正、身修が順序的に導き出される。大事なことは、心体である良知はもとより「自然の権度」であるのでその好悪に任せ、人為を加えないことである。

③「工夫による本体の確立」を基本とするが、本体の自律が工夫であり、本体と工夫を二分しないので「用功の極、自然に至れば即ち本体」と述べている。そのために「現在の一念」を「勿忘勿助の度」とする。

(5) 「問い」習心の認識が困難であることについて。

「答え」自己の分限に従い、(良知の) 自然な自検(自己点検)により、自覚して悔悟、改図に任せる。

(6) 「問い」物と知の実際の処。

「答え」知の体は虚(形而上)であり、その感応の時になって実際に認識できる。

(7) 「問い」体用動静とは。

「答え」常体と妙用は一味未分、「無前後内外而渾然一体」として理解する。内外寂感、発未発も同様である。

(8) 「問い」致知は『大学』だけの工夫か。

「答え」「身心意知、物格致誠正修」で人己の間、六経四子、すべて事足りる。聖門の教法の全ては『大学』に完備しており、「知」だけで「天下の道」を包括でき、「致」だけで一生の工夫を統括できる。

(9) 「問い」『中庸』の戒慎恐懼と格物致知は同じか。

「答え」戒懼(の念)は格物の念である。故にすべて慎独という。独、良知は絶対である。／理気は一体、理は至善、本体、天則、性命、である。／心学は虚無・禅学だという批判があるが、儒禅の区別に関しては先達が言い尽くしている。「心」は「至虚・至実」で

あり、事の是非の判断は心で定めて事が成就する。心事一体である。故に修斎治平の工夫は一心に統括される。

以上が「格致贍議」の概要であるが、その特徴は「所発の意」よりも「機」に着目していることである。これは念台と近似して大橋の反論の論点となる。また本体の自律作用を否定しないが、工夫から本体を目指す漸修主義である。そして本体については「無善無悪」の表現は無く、「至善」とする。その上での「心学」理気一体である。陽明の「無善無悪而至善」(『伝習録』巻上)、本体即工夫という基本線からすると、王門下の「帰寂」を柱とする思想に類すると言える。

「心学」は「理學」朱子学の定理―理意識が對抗軸としてあるのだが、秋陽の場合にはそれへの認識が稀薄である。これは幕末期の儒学全体に関わる問題であろう。

秋陽の「格致贍議」に示された見解は、訥庵の反論書(「論格致贍議」)によって更に深められる。具体的な検討は次回以降に行う。加えて他の池田、林、春日の対応についても述べる予定である。幕末の「王学」者の実態が如実に表れているからである。

尚、本稿は「格致贍議」に関する研究の第一稿である。

(続)

◇「参考資料」

◇1◇師承・交友の人士

○秋陽と切磋琢磨した「鳴鶴相和の諸士」は、池田草庵、林良斎、春日潜庵、大橋訥庵である。

○佐藤一斎（一七七二～一八五九）朱子学・陽明学を修得する。22才から林述斎の門下となり。天保十二年幕府儒官となる。
○池田草庵（一八一三～一八七八）春日潜庵、林良斎と親交する。程朱学から陸象山・王陽明をへて劉念台を信奉する。秋陽・斐山とは終生親交を結ぶ。

○林良斎（一八〇七～一八四九）大塩中斎に一時師事する。王門帰寂説、劉念台を信奉する。秋陽は「同士中第一の着実家」と評している。

○大橋訥庵（前出）

○春日潜庵（一八一～一八七八）程朱学から陽明学、王門帰寂説、劉念台を信奉し。勤王に尽力する。

○東沢瀉（一八三二～一八九一）、名は正純、字は崇一・崇一郎、沢瀉は号。一八五五年五月に秋陽（59才）に入門。幕末期には「必死組」を組織して藩政改革を目指す。桂島に流される。秋陽の陽明思想受容は、非現成説の立場であったが、沢瀉は良知現成説をとる。

◇2◇同時代の陽明学関連主要図書

- ①高瀬武次郎『陽明階梯 精神教育』（1899）
- ②高瀬武次郎『王陽明詳伝』（1904）
- ③高瀬武次郎『陽明主義の修養』（1918）
- ④山田準『陽明学精義』（初版1932）
- ⑤山田準『陽明概論』（1934・「東洋思想」）
- ⑥山田準『現代指導 陽明学講話』（1934）
- ⑦三島復『王陽明の哲学』（初版1934）
- ⑧保田清『王陽明』（初版1942）。

⑨山本正一『王陽明』（初版1943）

⑩高瀬武次郎『陸象山』（初版1924・第四版1929）の附録に王陽明関連。また秋月胤次『元明時代の儒教』（初版1928）。同『陸王研究』（初版1935・第二王学 王陽明 王学後継／第三篇 陽明学の我国に及ぼせる影響一）

*本研究は、JSPS科学研究費基盤研究20KK00066の助成を受けたものである。